

2009年の約1年間、韓国の梨花女子大学に赴任して、一般教養科目の1つである「微積分」などを英語で講義する機会があった。韓国の大学では同一内容の科目が英語と韓国語で開講されており、学生が選択する仕組みになっている。学生の側からみると、外国語の英語で数学を勉強するのは苦勞が多いが、その代わり最高評価の「A」がつく可能性が高まるので、向上心のある優秀な学生の多くが英語の授業を選択している。

この仕組みは、大学1年生の英語力が講義を受けるに足るほど高いことが前提であるから、語学力という面で日韓の学生の間には大差があることは否めない。だが、さらにその背景に注目してみると、大学教育が抱える2つの論点が見えてくる。

第1点は、韓国の大学において厳格な相対評価が定着していることである。最高評価の「A」を与えられる学生数の上限が定められ、教員は成績をつける際にその枠を超えることが許されない。

どんなに優秀なクラスでも例外は一切認められない。成

韓国に意欲、学生と報酬、評価の大学教育

績はウェブを通じて入力するので上限を超える入力は受け付けられず、交渉の余地はない。教員による評価の甘さや厳しさのばらつきがないことが「A」の価値を高め、社会が大学での成績に信頼を置いている。

第2点は、良い成績を得た学生に対する社会からの報酬があることである。成績優秀な学生は学費が免除され、企業から奨学金が支給され、就職にも大きく有利になるといった、いわば「頑張ってよかった」と思えるシステムが社会に形成されている。当然これは、第1点で述べた社会からの信頼のうえに成立していることである。

日本の若者は「消極的」だとか「内向き志向」などといわれる。それは不景気の世を反映しているのだとする向きもある。だが、経済がひっ迫し就職状況が悪い中でも積極性を失わない韓国の学生たちを見ていると、大学が成績評価の信頼度を高めることに努めて、社会がそれに応えて学生のモチベーションを高める仕組みを作ることが、解決の糸口になりそうだと感じる。

(東洋大学教授 小山信也)